

終わる世界に立つて。

アリスは思う。ここに至る道程の、果てしなきこと。そして未来はもはや行き着く果てに行き着いて。

終わる世界に立つて。

アリスは思う。この世界が終わっても、まだ変わりなく続く他の世界があり続けるのだらう、と。

終わる世界に立つて。

アリスは樂觀しない。たとえこの世界から逃れて生きながらえる術はあっても。

終わる世界に立つて。

アリスは絶望しない。たとえこの世界が減ぶことを止める術はないと知っても。

やがてすべての世界は巡りめぐってひとまわりして。転がった世界はまた次も変わらない有様だろうけど。それは天すらも知らず誰も考えられない不思議な話。アリスだけは知っている。次の世界で彼女はきつと。今と違う彼女になつて、もつと先へ進めるでしょう。

「お人形さんを作つて頂戴。ねえ、ばあや、アリスはお人形さんが欲しいの」

か細い声だった。ともすれば、窓から吹く涼風に流されてしまいそうな言葉。

ひざ掛け毛布に小さな手を載せて。顔を下から覗き込んで。

すっかり言葉が届くように。大事なお願いだから、ちゃんと聞いてもらいたくて。

アリスはばあやに言ったのだ。

ばあやや編み物の手を止めて、アリスの様子を見やう。声とおそろいの、か弱い手足。うつつすらと透ける赤と青。眼にも、髪にも、薄い色素。

華奢なのはアリスの母も、姉も同じだけれど。よその子に比べて尚活発なお姉さんに対して、身体を動かすのが好きではないアリスのことを、何かになぞらえて例えるなら。

きつと誰もが、同じ言葉を浮かべよう。

編み物に意識を戻す。そうして、出来るだけそつけなく返事をする。

「猫のぬいぐるみなら作つてあげますよ」

アリスはあからさまに落胆したようだった。

言つた相手が姉の方だったら、ここから勝負どころなのだが——どう言いくるめるか、年の功をふんだんに使つて考え出して、もう編み物どころではない。でも、アリスはききわけがいいから——、きつとこれで終わりだろう。

大人っぽいと、言うべきものだろうか。

すつかり編み物に戻つてしまつたばあやに、アリスが食い下がる。

「それじゃあいやよ。猫なんか家中にいるじゃない。人の形のぬいぐるみがいいの」

ばあやはちよつと驚いて、編み目の数を忘れてしまつた。

それは、姉と比べたら控えめだけれど、アリスにとつては精一杯の抵抗の表れだった。

そこまで言つて口をつぐんで、今度はまつすぐに、じつと彼女の方を見つめてくる。

ついさっきの演技つばきはどこにもない。姉のように、いかにも反対の言葉なんて聞きたくない、という拒み方でもないけれど。

それは確かに、子供っぽい反論の仕方だった。

ばあやはまさか食い下がられるとは思つていなくて。アリスはまさかすぐに断られるとは思つていなくて。

ふと、風がやんでいるのにアリスが気づいた。

ばあやが少し驚いたふうなのは、声がすっかり届いたからだろうか。——風は、私の声がちゃんと届くように、味方してくれたのかしら——思わず、息を呑んで、ばあやの次の言葉を待つ。

アリスがばあやを見つめているだけなのに、何人もの聴衆が、固唾を呑んで成り行きを見守っているような気配に。

昼間のふとした無音の中は、無音である故に満たされていった。

「そんなの……」

いよいよばあやが口を開いて、思わずアリスは顔を近づけた。

「……人こそどこにでもいますでしょ。さあさ、お外でお姉さん達と遊んできなさいな」

ぼうっ、とカーテンが揺れる音。どこかではしゃぐ子供達の声、萌える草の匂い。

みんな遠くのもので、部屋の中のやりとりなど誰も

知らない、分かっているのはアリスだけだった。

ばたばたと駆けていって、外に出て、でも姉さんと遊ぶのでも、草花を愛でるのでもない。

小走りでも、でも他の子よりはずっと遅い足取りで、たどり着く頃にはちよつとだけ息が上がっている。そのくらいの距離感が、彼女には身についている。

そこは小川がせせらぐ町の外れだった。

気持ちいい日差しの小道と、緩やかにまどろむ木陰が隣り合っているいいところだったが、今はそこで遊ぶ子供はいない。

いつか、子供がひとり川に流されかけたことがあった。町外れの、大人には立ち寄る理由も無い不便な場所だから、危うく取り返しをつかなくことになるところだったらしい。その子供は姉の友達で、姉はその始終を見ていた数少ない目撃者なのだが、アリスはそのことについても、その子供のこともよく知らない。

ただ、人気のないその場所はアリスが遊ぶのに好ましいという、それだけをよく知っていた。

「まったく！ ばあやがあんなに頑固だったなんて。どうしてお人形のひとつくらい作ってくれないのかしら。暇さえあれば、編み物ばかりしてるのに！」
鬱憤が炸裂したようにそう言い放つと、ごろんと木陰に転がった。

「私にはお人形が必要なのよ！」

さらに言うなり、今度は勢いよく起き上がる。

そこに、

「アリス！ いつからあなたはそんなに聞き分けないう子になったの？」

新たな、少し大人びた声。しかし、主の姿は無い。

他に誰も、声の出所を探す者の姿すらない。その声は紛れも無く、アリス自身から発せられたものだ。「そんなことを言つて！ あなたのためよ！」

アリスは少し姿勢を崩して、何処へとも無く言う。

「あなたのために、私は慣れないわがまままで言うて……ばあやを困らせちゃったじゃないの！」

いかにも子供っぽい様子で、もうひとりの誰かに、向かってまくしたてる。

「私は別にいいのよ、このままで。それよりも、あなたがもつとしっかりした子になれば、私がいちいちあなたを叱り付けなくていいようになれば、アリスの身体は窮屈じゃなくなるでしょ」

誰かの、アリスが、そういつてアリスを諭そうとする。ひとりですたりで、確かにアリスの身体はひっそりなしに、ふたりぶんの動きを演じ続けて窮屈そうだ。

つまりこれが、アリスが人形を欲しがった経緯なのである。

ばあやが見れば、いや、アリスを知る者ならば誰でも、この光景に驚きを隠せないだろう。

どちらのアリスも、彼らの知らない誰かなのだから。

まだアリスがほんの小さな、今よりもっと小さなころ。

“アリスちゃんは、おとなしくていい子なのね”

“色も白くて、じつとしてるから本当にお人形さんみたい”

“お姉さんにおもちゃにされないか心配だわ”

誰も彼もがそう言った。まるでそう書かれた札でもついているみたいに。

それを根に持っていたわけでも、そもそもそう言われたことを覚えていたわけでもないのだが――アリスの記憶には無いが、こんな挿話がある。

アリスの父が上機嫌で帰宅すると、母はため息をつく。元来好事家であるその人が、またぞろ何か珍奇な物を持ち帰ってきた証左だからだ。しかし、その時だけは話が別だった。

その珍品は、どこかの国から流れ流れてきたという陶器の人形だった。

割れ物である故か、或いは色の白さ故か、その人形から漂う儚さに、父も母も、当然ばあやも、アリスのことを連想せずにはいられなかった。

自分の持ち帰る稀覯物が珍しく評判で、好事家の御多分に漏れず、彼は増長した。子供達にも見せようとして、しかしためらった。子供にこの素朴な魅力が伝わるものかは怪しく、それ以上に、不慮の事故が起こる可能性を憂慮せざるを得ないのだった。

しかし、逸る気持ちは抑えきれず……結局、アリスにだけ見せるということにしたのだ。

「ほら、珍しいお人形さんだ」

そう言っただけでアリスに見せたが、その表情に彼が期待する何らかの反応は見られなかった。

まだ物心もついていない子供のことだからしょうがない。

ただ、この時の、物言わぬアリスの気持ちを代弁するのなら。

厭、^{いや}だった。

アリスにとつて、父とは厳格な態度と落ち着いた声の持ち主であり、その猫なで声の好事家が父と同じは思えなかつたということもあるし、また、その“お人形”という言葉の響きに飲み込めぬものがあつたということもある。

お人形とは、アリス自身を表す言葉なのだ。

その言葉が聞こえるときは、いつも自分が呼ばれているときである。アリスの幼い言語中枢は、そう解釈しているのだ。

人形をはじめ見たわけではない。姉が人形を使ってアリスをあやしたりするのは、よく見られた光景だった。ただ、その際に人形は何らかの役割を演じさせられているのが常であつて、“お人形さん”という扱われ方はしない。

聞きなれない声が、見慣れないものを指して“お人形さん”と言う――

――アリスはむずがった。

アリスがそうすることは普段ほとんどない。偶然といつてもいいほど稀有な事態だった。だが、子供の振り切れた感情は、往々にして衝動を生む。

その後起きたことは、わざわざ書き記すのもただの無情というものだろう。

それから、特に誰が言い出したわけでもなく、ただ何となくだが――人形という言葉は、アリスの周囲においてタブー視されるようになった。

家にあつた人形はこつそりと処分された。姉は、遊び相手として物足らないアリスよりも、友達と遊ぶことを多く選ぶようになっていたから、その変化に気づかなかつた。

人形と呼ばれることも少なくなつて、しばらく経つた後に、アリスの言語中枢は正常に、人形という存在を学習するに至つた。

人形との縁は、既に切れぬものとなつていたが。

アリスの身体に同居するもうひとりの自分。アリスを叱り付け励ますことを行動の指針とする、大人びたその存在は、ふとしたきつかけで生まれた。

普段感情を露にしないアリスでも、足を滑らせ身体をしたたかに打ち付けられ、涙のひとつも出ようものである。思わずぐずり声があがろうとしたその刹那。

「ほら、そんなに泣いたってしょうがないでしょ！」

そんな声が、するりと口をついて出たのだ。涙が止まった。

驚きに呆気にとられた故か、叱咤に答えた成果か、はたまた、誰かの表情に演じ変えたためか。

余りに自然なやり取りに、しかし、どこか胸のはしがくすぐられるような感触があった。

変化は誰の眼にも留まらないところで、しかし着実に起こっていた。

はきはきと、アリスの手を引いて歩くお姉さんのようなその誰か。

その性質は、実際の姉とはもちろん、彼女らの母とも、当然ばあやとも異なっていた。

モデルのいない誰かのことを、さも自然に——ほとんど無意識にやっているのだが——演じきつている自分が誇らしく、しつかりもののその性格の、ちようど反対になるように、手を引かれる側のアリスは、子供っぽい、彼女の姉に似た性格になっていった。

アリスがふたりになっているとき、周囲から「アリスはこういう子供だ」と思われている性格は、どこかに引つ込んでしまっているようだった。

例えるのが野暮なほどに、それはまさしく人形遊びだった。或いは、操る側のアリスは見えないところに引つ込み、彼女ひとりが人形を操りふたりの人間を演じるといふそれは、人形劇そのものだった。

アリスが、もうひとつの身体にと欲しがった人形はひとつだった。元からある身体を、既に所有しているひとつめの人形だと、考えている表れだろうか。

「私が——」

アリスの口調は淀みない。

台本があつて、それに沿つて演じているのでも、即興で会話を作っているのでもない。ひとりで会話をすると、奇妙さに眼をつぶれば、そう、まさに眼を閉じて聞き入れれば、それは子供がふたりでおしゃべりをしてゐる光景でしかない。

「私が、お人形をつくればいいのよ！　ばあやが作つてくれないのなら、そうするしかないわ！」

片方が、さも名案を思いついたとばかりに言い、もう片方が、

「またあなたは、そんな突拍子も無いことを言つて！」

ばあやのお裁縫を手伝つたことも無いあなたが、人形を作るなんて、そんなのできつこないに決まつているわ。お人形が、どうやって出来ているのかも知らないんでしよう？」

現実的に嗜める。

それでも諦める気は少しも無いようで、

「知らないわ！　知らないけれど、それならばあやに聞けば……駄目ね、きつとまた教えてくれないわ。そうだ、父さんは知りたいことがある時、決まつて書齋で調べ物をするわ。あんなにたくさんの本があるのだから、きつとお人形さんを作る方法が書かれた本もあるはずよ！」

そう決めた。アリスの顔は希望を見つけ喜びに満ち、すぐに一変して落ち着いた表情になる。

「きつと、お人形の作り方なんて本はないわよ。お人形のことを書いてある本なら、あるのかも知れないけれど……」

「それでも、色んなことを学んでいけば、それらが結びついて、ふと思いつくのもしれないわ。人形を作る方法を！」

「ずいぶん、遠回りなやり方のような気がするけど、……色々なことを学ぶのは、悪くないことよね」

どうやら、意見は一致したようである。

「人形を作るのよ、アリス。あなたのためのにんぎょうの身体を」

「仕方ないから付き合うわ、アリス。立派な人形からだを作つて頂戴な」

小川のせせらぎを背景に、少女ふたりのおしやべりは、流れるように続いている。

夜。

月が怪しく、かつ綺麗に輝く。

灯りの消えた部屋で、アリスはそんな月を眺めている。幸いにしてまん丸の満月。

ずっと見ていると、……その魅惑的な輝きを眼の中に閉じ込めてしまえそうで、そうすれば、暗い中でも本が読めるのではないか。

何も知らないはずのアリスは、そんな不思議な思いつきをもつて――

――本当に、そのまま読書を始めたのだ。

その月明かりでは、人間が本を読むのには暗すぎる。その哲学者の本は、子供の夜更かしには難しすぎる。少し前のこと、アリスは家の者の眼を盗んで、父の書齋に踏み入った。ゆつくり本を選んでいる暇はなかつた。背表紙の並びを追える限り追つたけれど、人形の文字は見当たらなくて、本を探すことよりも、その姿が誰かの眼に触れることを避けたくて。

なくなつても気づかれないようなものを一冊抜き取つて、駆け足で自分の部屋に持ち込んだのだ。

アリスはまるで昼間の明るさの中にいるかのよう
に、文字を眼で追ひ、ページをめくつていく。開け放した窓から差し込む月光では、部屋に蒼のヴェールをかけるのがせいぜいだというのに。本当に読めているのか？ そう疑念を浮かべない者はいないだろう。

しかしその部屋にはアリスしかおらず、その眼は怪しく綺麗に輝いていた。月に魅せられたように。

そうして過ぎて行つた日々は、それほど長くは無い。その転機はアリスが人形を欲しがることを待つていたかのように、頃合よくしてやつてきた。

流れの人形芸人がやつてきたのである。

アリスの住む町に、そうした流浪者たちがやつてくることは、頻繁にあることではないものの、そう珍しいことではない。アリスの生まれる前のことだが、人形劇を興行する一団がやつてきたことも何度かあった。

しかし、その客人はまさにアリスが待ち望んでいたものを携えてやつてきたのだ。そういう意味では、前例の無い稀有な客人であり、アリスにとつては恵み与えられた僥倖だった。

独りきりの人形劇団、と見て、誰もがひとつかふたつの人形を操る、小規模な劇を想像した。

そして、それはたちまち裏切られた。

急ごしらえの、人形のための小さなステージ。

その暗幕が開くなり、五つのマリオネットが一度に動き始めたのだ。瞬間、場に居合わせた全ての人の眼も操られたように、一斉に大きく見開かれた。

独りで操っているのではないのか？ そう疑問が浮かぶ。上から垂らした糸に操られるマリオネットは、独りではどう頑張つてもふたつまでしか操作し得ないはずだと、誰もが不思議がった。

しかし、ステージの側にはリユートの演奏を買つて出た男と、当の人形師本人しかいないはずなのだ。間違いなく、独りで五つの人形を動かしている。

一瞬で眼を奪われた観客は、すぐさま人形達の動きを追い始める。人々の間から感嘆の声が漏れ出すのに、そう時間はかからなかった。

見れば見るほど、一度に多数の人形を動かしているとは思えない。人形の動きは自然だったのだ。

——これは、人形ではなく人体ではないのか。

そんな飛躍した発想を持つものがでるのも、無理のないことだった。

人形達の動きに、一切の誇張も許されていない。

劇には、筋書きも語りもなく、ほとんど音楽にあわせたダンスのようなものだった。人形達が踊っているというよりは、人間が踊る様をただしくなぞり描いたというのが近い。その精度は恐るべきもので、例えば、二つの人形が近づいて手を合わせるとき、ちぐはぐな動きでも、ぴたりと同時にするのもなく、生きた人間同士ならではの息の合わせ方のようなものが感ぜられるのだ。人形が、生きています。

悪く言えば地味だった。

人形劇といえれば子供の慰みだろうと、大人達はたいた期待もせず彼らの子供を連れてきたのだが。

実際には、大人達はこぞって人形師の技術に熱中するものの、子供達は人間の挙措の細やかさなど解するはずも無く、見るべきものを知らなかった。

ただひとり、アリスを除いては。

姉がいかにも退屈そうなのを、一瞬だけ横目に見る。

——まあ、絵も会話も無い本なんて読んでもしょうがないと、心から思っているような人だから。

ここがこう優れているのだ、こうすごいのだと、教えることもせず、アリスはひたすら自分のために、人形達の所作を凝視した。

ため息が出る。

アリスはうつとりとしつつも、他の大人たちと同じように、人形師がどうやって五つもの人形を操っているのか推測した。

分からない。

——ひょっとして、分かるはずもない方法で動かしているのではないかしら？ 種も仕掛けも、なあんにもないんじゃないかしら？

知識のある大人達なら、ひとりくらい謎を解いたものがいるだろう。アリスはそれを当てにした。

その場にいた中に、それを看破した者は無かった。次の週に、また劇が行われた。

会場は、噂を聞きつけた大人たちでごった返した。その中でただひとり、アリスだけが子供だった。

大人達は、今日こそ劇の秘密を明かしてやると息巻いたが、アリスはとづくに謎を解くのを諦めていた。彼女はその日、純粹に人形達のダンスを楽しんだ。

どれだけ見ても飽きることがなく、ため息が尽きることもない。

——あんなふうに入形を操れたら、その人形をまるとつきりひとりの友達として扱えたら、いったいどんな気持ちができるのかしら？

アリスは、想像の中で人形師と自分を重ねていた。人形達が楽しげに踊るのを、俯瞰して眺める自分を。

結局、その日も大人達は人形師との知恵比べに敗れた。その次の週にも、またたくさんの大人達とひとりの子供が集まって、やはり結果は同じだった。

そして、最後の公演の日がやってきた。

その日行われた劇は、いつものダンスではなかった。どこか物悲しいリュートの調べが響いて、暗幕が開く。棺桶を模した小さな箱を、四つの人形が囲んでいる。葬式の光景だった。亡くなったひとりとの、別

れを惜しむ仕草がよつつ続いて、式は終わる。

リュートが時の流れを告げ、やがて次の葬式が開かれる。ひとりが箱の中に入って、それを三人が囲む。

また、別れを惜しむ仕草。その最中に、亡くなったひとりが箱の中からふわりと浮き上がる。魂が身体を離れ天に昇る様だろうか。他の三人から離れ、死者はステージの天井までたどり着く。するとそこに、その前に亡くなった者が現れた。

死を悲しむ三人を下に、天国での再開を喜ぶ二人。

また時は移ろい、次の葬式、また次と——人形達の動きは少しもあせらないで、その世界の時間間隔が、しつかりとアリスにも感じとることができた。

時間が経つほどに、生きたものたちは姿こそ変えないものの、仕草に老いが見え始めていく。そして、仲間がひとりづつ減っていく寂しさが、折り重なって積もっていく。最後にひとり取り残されたものの悲しみは深く、彼の最期は長くも経たずやってきた。

その死を看取る姿はない。箱に入れる者もない。ひとり淋しく死を迎える。——しかしそれは、地上の光景でしかない。その天井。天国では彼の四人の仲間が、その死を悼んでいた。

やがて、最期の魂が地上を離れる。
浮き上がって天井を目指す。

——早くたどり着いて！

ステージの外、観客達から想いが伝わっていく。しかし、魂はゆっくり、ゆっくりと昇っていく。

リユートが遠くまで響き、距離の長さを感じさせる。やがて天国に到着し、彼は、飛び上がって仲間との再会を喜んだ。

水の深層を泳いでいるようだったリユートの音かやみ、あたりはしんと静まった。悲しみを歌い続けてきたその楽器の役目は終わったのだ。

そして、すぐに盛大な喝采が場を満たした。

いつの間にやら、観客達は謎解きも忘れて、劇に熱中していたのだった。

ただひとり——アリスを除いて。

暗幕は閉じられ、人々は余韻覚めやらぬうちにと、周囲の者と感動を共有するのに没頭した。

興奮を隠せぬ大人たちを背に、アリスは立ち去った。僅かばかりの笑みを浮かべて。

町中の人々に惜しまれながらも、人形師は公演を終えた後の長居は無用と、その日のうちに発つていった。

若緑が鮮やかな並木道を抜けると、開けた先に小川が見える。

そこで、ひとりの少女が人形師を待ち受けていた。アリスの姿を認めて、人形師の口元がやや引き締まる。何か警戒しているふうである。相手はただの子供だというのに。

一方でアリスの方はというと、実は人形師の姿をまともに見たのは初めてだった。劇の前後に見かけたことはあつたが、何の印象も残っていなかった。改めて今、その人物を正面から見つめるが、果たして、その格好に何ら観察すべきものを見出せなかった。取り掛かりすらない。

深く被つたとんがり帽子が相貌を隠し、広袖の服の中の体つきは想像もつかない。

——男の人だか、女の人だかもわからないわ。

不思議な技術で、人形を表情豊かに操る芸人として、そのミステリアスな雰囲気はまさにうつついで、出来すぎている。

——種や仕掛けがあるとすれば、そこだけね。

やがて人形師がアリスの目前に立つ。往來人は足を止め、少女は特に反応して見せるでもなく、お互いにまだ観察が済んでないと言わんばかりに、少しの間見つめあつた。

アリスは、どう切り出すか迷っていた。少しして、意を決したように一息つき、それからこう言つた。

「人形劇、全部見ました。感激しました。……すごいですね」

その声に嗟嘆の意はこもっていない。アリスは勤めて冷静を装つていた。緊張していると、相手に悟られないように息を吸い込み、そつけなくこう続けた。「本当に生きている人形を持つているなんて」

そう断定するのに、少女はどれほどの勇気を費やしたろうか？

言葉を放つた後に引き締めた唇から、冷静さが剥がれたその向こう側が、少しだけ伺えた。

対して人形師はまるで表情を変えなかった。

そのことが、アリスの胸中を少しだけかき乱した。

やや合間があつて、人形師が口を開いた。

「驚いたよ」

存外に人間味のある男性の声で、却つてアリスが面食らつた。

アリスを中で糸がふつと切れた。縛り付けていた感情を解いて、遅れて背中を汗が伝う。

「ずいぶんと長い間、流浪の人形芸人をやっているけれど、……私の人形の真実を言い当てたのは、君が初めてだよ」

——やつぱり、やつぱりそうだったのね！

アリスは叫び声をあげそうな心持になつたが、唇はわなわなと少し震えたつきり音を出さなかつた。

解き明かせる不思議など何も存在しなかつたのだ。

彼の仕込んだ種があるとすれば、それは人形師という擬装のための仕掛けなのだった。

真実を突きつけられた人形師は、しかし狼狽するでもなく、却つてさつぱりとしたふうに笑つて見せた。

帽子の影から伺える口元は平静を保つていたが。

「そうとも。私は人形を生きているように見せかける人形師などではない。人形が生きているのをそのまま見せているだけなんだよ。しかし、人形はひとりだけで動いて回るのではない。そこには少しだけ技術の介入があるんだ。だから人形師と呼ばれることは間違ひではないと思うけれど……君は私を、詐欺師と呼ぶかい？」

いいえ、とアリスは首を振る。それにしても、意外によくしゃべるものね、と心中でごちる。

「不思議を見抜ける大人はいない。まともな見識を持つ者ならば、かならずや人形は人形師の手によつて動かされているはずだ」という先入観からは離れられない。最も、同業者……人形師ではなく、不思議を知る同輩は一目で見抜くけれど」

不思議、という表現。

——不思議って、どんなことだったかしら。

アリスはその言葉の行き着く先を知らない。

「それと、これこそ不思議なことだと私は思うが、日本人は騙せない。彼らは決まってこの種の騙しを見抜く術を知っているらしい」

日本ジパンという言葉には少なからず聞き覚えがあった。

遠い東にある島らしい。その言葉を聴くと、父の眼の色がかならず変わるのだった。

——ああ、つまり……そういうのが、不思議ってことなのかしら。

しかし父には人形師の真実は見抜けなかった。いづから好事家をしているのか、アリスは知らないが、

——大人になってしまったら、どんなに知りたいと、近づきたいと思っても、不思議というものには決して触れられないものなのね。

そんな父を、どこか滑稽に感じていた。

「さて、君は見事真実を突き詰めたわけだ。もしかしたら君は大人たちにそれを話すかもしれない。もちろんみんな信じないだろうけど、もし方が一、誰かが信じてしまったら、不思議に対する免疫をつけてしまったら。同業者がそうと知らず君の町を訪れて、その時こそ大変なことになるかもしれない。……私達にとつて、それは何より恐るべきものだ。不思議を知る者なんて、ひとりでも少ない方がいいんだ。……だから、口封じのために、私は君の言うことをひとつ聞かなければならない。そうだろうか？」

ひとりでにそう述べたものだから、アリスは拍子抜けした。どうやって、そう、言いくるめるか、色々と思案していたというのに。

——話は早い方がいいわ。

そう気を取り直して、アリスはこう言った。

「お人形さんをひとつちょうだい」

大それた願いだった。

人形師にとつては、大事な商売道具であり、秘すべき不思議の詰まった門外不出の逸品であるはずだった。

不思議を知るだけでは飽き足らず、それを手中に収めたいとは——人形師は、ここに至つて初めて愉快そうに口元を歪めた。

ちよど雲がさして、彼らの上に影を作つたからだろうか。それは、下卑た笑みに見えた。

つい、と手を振ると、袖口からひとつの人形が飛び出した。

アリスは慌ててそれを受け止める。

女の子の人形だった。さらさら長い金の髪。

はじめて見る人形だった。

「劇にはね、大人の人形しか使わないんだ。私は別に、いつつしか不思議の人形を持っていないわけじゃない」

まさか本当に、ここまですんなりと事が運ぶとは思つていなかったから。

ここに至つて、アリスは慌て始めた。「本当にいいの？」

眼を丸くして問う。

人形師は、口元を引き締めなおして、しかし声だけは変わらず愉快そうに言う。

「だつて欲しかったのだろう？」

「それでも、仲間から離れたら、この子は寂しくないのかしら？」

ふと思つて、そう言つてしまった。彼女が人形を欲しがつた理由を鑑みれば、それは考えてはいけななことだった。果たして人形に「気持ち」というものがあるならば——彼女の目的は、それを踏みにじることと同じだった。

「いつか、君が人形を動かす術すべを身に着ければ、きつと淋しくはなくなるだろう。……人形に、力を宿す方は、それだけは、教えることはできないけれど」

最後の一言は、これだけは神妙になつて言つた。

手にした人形が、何だかずつしりと重みのあるもののように、アリスには感じられた。

——アリス、あなたは人形が欲しいだけでしよう！叱咤が聞こえて、アリスの表情から迷いが消えた。

「ありがとう。人形師様」

そう言つて、深々と頭を下げた。

勢いよく走り出して、もう人形師の方は見なかった。

——ああ、眩しい。

人形師は、帽子の奥に隠れた眼を細めた。

名も知らぬ少女の、走り行く先が眩しく見えて。

「大人の中に、ひとりだけ熱心に見る子供が紛れているのに気づいた時点で……さっさと退散しなかつた私の負けだ。次からは、そうしよう。ただ——」

人形師は呟いて、また痛快そうに口元を曲げて。

「——私の生あるうちに、次はないだろうけど」

頭上にかかった雲が晴れるまで。

アリスの行く道を、人形師はずっと見つめていた。

アリスは無事にふたりになった。

吊つた糸を操る手はまだぎこちないけれど。言葉を発する口だけはやつぱりひとつしかなないけれど。

それでも身体は窮屈じゃなくなった。

アリスは何処へ行くにも人形のアリスと一緒に——周囲の者をどれだけ驚かせたか。それは人形師の芸に匹敵した。彼らの知るアリスはどこかへ消えてしまひ、代わりに二人の見知らぬ少女が、アリスの姿と人形の姿でそこにいた。ああ、アリスは何処へ？

アリスは人形師に連れて行かれたのだ。そう主張する者がいた。

——あの人形は人間から作られているんだ。旅先で自分の芸に興味を持った子供を連れ去つて、それを……魔法だ！魔法で人形に変えてしまふ、あいつは悪い魔法使いだ！代わりにいらなくなった人形を置いていくんだ。あのふたりは人形なんだ！

「やめにしろ！」

そう一喝したのは、アリスの父だった。

好事家の思いつきそうなことを、彼は切つて捨てた。

そのことが、錯乱気味に語る男を落ち着かせた。

「子供の遊びだ。ただ、少し度が過ぎている」

アリスが勝手に、人形師に影響されただけだという彼の言葉は、この町における人形師の名誉を守る働きをした。かの人はすばらしい人形師で、子供に邪な術をかけるような悪人ではない。

——まして、魔法使いなどとは！

アリスの父にとつて、人形師の劇は途方も無く不思議で、たまらなく魅力的なものだった。好事家の血が大いにうずいた。しかし同時に、それはあくまで魔法にみせかけられた、高度な技術であると思つていた。人形師の絶え間ない鍛錬と研究が生んだ、世にも珍しい人形躁術。それを怪しげな魔法などと言つてしまつては、却つて失礼というものだ。

父の、そんな人形師への深い尊敬の念をアリスが知つたら、どんな顔をするだろう。

想像しようもない。アリスはもはや、他者への興味などさつぱりと失つていたのである。彼女にはもうふたつの身体があればそれでよかつた。姉も母もばあやも友達も、何人たりとも彼女には用なしだった。

——いつそどこかへ行つてしまいたいわ！

人形を自在に操れるようになったら、そうしようとアリスは考えた。人形師として旅をして、いつか。人形に力を与える方法をその手にするのだ。

そのころにはきつと、自分で人形を作るやり方だつて知つてはきつと、自分の身体には、その人形を割り当てればいい。

そうなれば——今はアリスの身体をしているこの人形は、かけがえの無い友達になつてくれるに違いない。

ふたりのアリスはそれぞれの笑みを浮かべた。

「ねえ、アリス」

母が声をかけてきた。肉体の方のアリスへと。

「いい子だから、そろそろ人形遊びはほどほどにして、お姉さん達とも遊びなさいな」

いかにも、腫れ物に触るといった様子だった。

——いい子だから。

いい子なのはどっちのアリスかしら？ 心中で呟く。いい子のアリスは人形遊びをやめにしたといけないのかしら？ 母が声をかけてきたのはこつちのアリスだったから、多分母にとっては、こちらのアリスがいい子なのだろう。

しょうがないわねお母さん。ひとつだけ、いい子のアリスは言うことをきいてあげるわ。

いい子のアリスは人形遊びをやめた。肉体の方の身体が空席になって、そこには別のアリスが収まった。

新しいアリスと、人形の方のアリスは何事もなかったかのようにおしゃべりを再開した。

おしゃべりの様相は少し異なっていて。

新しいアリスは——怪しく綺麗に輝く眼をしていて——こういうのだった。

「やんちゃをするのがいい子なのかしら。私はてつきり、おとなしくて、物分かりのすんなりいくのがいい子なのだと思うってたわ」

そして、変わらず人形の中に収まっているアリスが答える。

「私も、あの子よりも自分がいい子なのだと思うていたけれど、……いい子は人形遊びをやめなきゃいけないのなら、私は悪い子がいいわね」

同感ね、肉体のアリスが言つて、ふたりいっしょに笑つて見せた。

まるで満月を見ているようにうつとりと、片方が入れ替わるだけで、おしゃべりの雰囲気は大きく変わって見えた。

ますます気味が悪いと、思う者は多かつた。

眼に余る。

アリスの父は、そう判断した。その顔に、変わりものを欲する好事家の気配は無い。娘の奇行を改めんとする父親の威厳だけが窺えた。

矯正するのは簡単で、腕ずくで取り上げてしまえばいい。

彼は妻にそうすることを告げた。妻は、だけどきつとアリスは悲しむわ、と辛そうに言った。

泣くだろう、恨むだろう。

——それで構わない。おれは父親なのだ。そういうものであつていい。そういうものでなければならぬ。

例えこれから、永遠に疎ましがられる存在となつても。

娘のためにそうするのだ。

——おれの趣味のせいで、アリスが奇行に走つたのなら、好事家なんてやめてしまおう。

それは、固い決心の元に行われた。アリスは——父親に触れられた瞬間から、空っぽになつてしまつて、抵抗するでもなく、されるままだった。

人形がなかったら。

もはや何者にもなれない。

人形が連れ去られ、アリスは何もしばらく出来なかつた。

ショックだつたらう、辛いのだろう。母はそんなアリスの様子を見て、胸に痛みを覚えた。

アリスがかわいそうだわ、姉はそう思つたけど、でもこれで、アリスと一緒に遊んでくれるようになればいいと、少し心を弾ませた。

部屋にこもつて、椅子に座つて、ほとんど動かさずに、俯いたままで。鋭く冷たい瞳から、かつての怪しさの色はなりを潜めている。華奢な白い腕——精巧な人形のようなアリスは、しばらくそのまま置いて。

次の満月、ふたたび瞳に怪しげな光が灯つた。

——元になんか戻つてやるものか。私はもういい子じゃないんだ。

いい子と言われるような、周囲に好かれるようなものに、アリスはそうはならないと決めたのだ。

「少し、少しだけ、うれしくて舞い上がっていたのね、私は。とんだへまをしたけれど、……どうせ貰い物の人形だもの。私が人形を作れば、何の問題もないじゃない」

そうつぶやく声に、返事は無い。あのおしやまなアリスは、人形と一緒に捨てられてしまったのだ。

アリスは再び、本を読み知識をつける日々に戻つた。しかし今度は、昼間もほとんど部屋で本を読んで過ごす。父の書齋にも、忍び込んだりしないで堂々と入るようになった。ただ、そこには以前の半分くらいの蔵書しかなかったが。その中から、一冊選び、読み終え、棚に戻してまた一冊選び。どこから発想が得られるか分からないから、どんなものでも読んだ。

あせる気持ちはないわけではない。こんな遠回りなやり方で、本当に人形が作れるのかと——心が逸ると、そう思つてしまう。

そんな時、彼女はひとりで自分を律しなければならなかった。

——急いたせいで、こんなことになったんだ。結果をすぐに欲しがったから。

あの人形師には、人形の作り方を訊けばよかったのだ。それを、人形だけを欲しがったから、こんなことに。

胸の中で、何かがじわじわと、アリスの心を蝕んでいく。歯を食いしばつてそれに耐える。耐えねばならないのだ、捨てられた、あのアリスのためにも。

——会いたいよ、アリス。

気持ちは眼からあふれ出る。さながら月夜の雨だった。

以前は、身体が無くてもふたりでいられた。

でも、新しい身体ごと捨てられてしまったから、あのアリスはもうここにはいないのだ。

彼女が人形を作つて、その新しい身体には——いつたい誰が入るのだろうか？

あのアリスが帰ってくるのだろうか？ 身体と一緒に、新しいアリスの心も生まれるのだろうか。

——それとも。

アリスは頭を振つて、その考えを振り払つた。気づけばずっと同じページを開いたままだった。

日が進むごとに、アリスの気持ちは振り切れやすくなつていった。次の満月の頃には、もう本を読む時間よりも、めそめそと泣いている時間のほうが長いらいで、

「ああもう、見ていられないわ」

ああ、私は幻聴を聴くほどになつてしまったと、ため息をついて本を閉じた。

諦めるべきなのかもしれない。

人形を作る代わりに、いい子のアリスを作り直して、私はもう眠りにつこうか。

月を見ようと、窓の前に立つ。月の光は、優雅というよりも剣呑だった。これを見て、心安らかにいられるやつは、きつとおかしいやつだ。そんな自分の考えに気づいて、荒んでいると自覚した。

ふと、見上げた視線を地面に降ろした。ああいやだ、今度は幻視を視るようになってしまったわ。

月のスポットライトを身に受けて、あの人形がそこにいた。

——本当に、都合のいいものを、都合よく視たり聴いたり……。

彼女はそうごちて、それが冷静を装える限界で、次の瞬間には駆け出していった。

月夜に飛び出して。

人形は、アリスの姿を認めると、逃げ出した。

——ああ……どうして？

アリスはもちろん追いかける。

満月とはいえ、夜の一寸先には闇しかない。

それでも人形の背中が見えるから。

アリスはそれだけを見て走り続ける。

——どうして、逃げるの？ 私に会いに来てくれた
んでしよう？

声をかけても、人形は止まらない。

どれだけ走ったか。

小川のせせらぐ音が聴こえる。

川が何処を流れているのか、アリスには見えない。

でも、人形を追っているから、落ちたりなんかする
はずない。

いつの間にか靴が脱げていたけれど。

止まるわけにはいかないのだから。

追いかけても、追いかけても。

ちつとも距離が縮まらない。

それでも——見えるから。

小川の音がなくなつて。

ここは何処かしら？

風もなくなつて、何の気配もしなくなつて。

それでも走る。見えるから。

月明かりが、アリスと人形を照らしていたのに。

月までなくなつてしまった。

其処はもう何処の現実でもない。

アリスと人形は、その到達点をくぐつた。

この瞬間——アリスは現実から姿を消して、
彼女は幻想の存在になつたのだ。

残された者たちは深く悲しんで、それでも時がた
てばその感情は薄らいで、やがては彼女のことを知る
ものもいなくなる。

端境。
はざかい。

何処でもない何処か。

その場所で、サラはひとりである。誰かを待つようなそぶりだ。

ただ、それを期待しているというふうでもない。

ここに来る奴なんか、いないならその方がいい。

そう思ってもいるが、それでも彼女は誰かを待っている。

その場所は、人間の地図にはなくて、そしてサラは人間ではない。

サラはこの境目の場所で、さらに自分がいられる一線を定めている。

目印も何もない虚空の一線。飽きるほどに長い時間、その光景を眺め続けていた彼女は特に意識するでもなくその存在を把握できる。

その場所を越えてしまったら、もう戻れないかもしれないのだ。

一寸先が闇であると、わかっているのなら、まだ救いがあるというものだ。

その一線を越えた先に、幽霊の漂っているのが、サラの立っているところからでも確認できる。そうと安心して、その一線を越えたら——靈魂の姿は消えうせて、振り返ってもそこに自分のいた形跡はかけられない、なんてことがあるかもしれない。そうになると、もう帰ろうとしても帰れない。どこか行き着くところに行くしかない。

どこへと繋がっているのか分からぬが、必ずどこかへは繋がっている。

それは向こうからでも同じことで、あちらの端境で迷い込んだ誰かがこちらにやってくることもある。

サラはそれを待っているのだ。

人間界と呼ばれる場所からも、迷い込む者がいる。魔獣、妖怪、幽霊、亡霊、悪魔——この道の行き着く先はそんなやつらの溜まり場だ。

魔に属する者にとつては、人間界は居心地が悪いと感じることもある。そういう者が、望んでこの端境に飛び込んでくることもある。

人間界では異形のもの。そんな彼らを、サラは快く迎え入れて、彼女の背後に広がる世界に通してやる。この先の世界は、魔性の者には居心地よい。

一線の向こうに、一匹の幽鬼が感づいている。サラはその迷走する様を眼で追っている。他に見るものもないのだ。幽霊がぼやぼやと漂っているほかには、ひたすら暗黒が満ちているだけだ。

彼らの存在を示す光源はどこにあるのだろうか？

この暗黒の地面の正体は何だろうか？

——そんな疑問を持ったこともあった。しかし、考えても詮方ないことなのだ。だから、今はまんじりともしないで、ただ突っ立って、端境に迷い込む誰かを待つだけだ。

「ああ、門番の仕事のなんて暇なこと！」

愚痴のひとつもこぼれるものだが——しかし、すぐにサラは息を呑む。

何者か。一線を越えて近づく気配。

人形だ。ひとつの人形が、こちらに向かつて駆けてくる。

かわいらしい。人形がひとりでに動くなんて——よつぽどひどい壊れ方をしたのだろう。きつと迫害されたに違いないと、出迎えるために一步を踏み出し、ひとりではないと悟った。まだ誰か、こちらに向かう者がいる。

そいつは人形を追いかけて、そのすぐ後ろを走っていた。それにもかかわらず、サラがその存在に気づくまで、ちよつとした時間差があった。魔的な気配に乏しい存在。妖気を放つわけでも、エーテル体を体内に抱えているわけでもない、二本足。サラにとつては人形よりも気配が希薄な——人間。

人間の、少女だ。

姿を認めて尚、サラはその事実を信じられずにいた。無理も無い。人間の姿を見るのは、初めてのことだし、まさか自分がそれを目撃することになるとは——思つても、いかなかった。

門番の仕事は数人での持ちまわり制で、その役割が生まれてから長い長い時があつたが、人間を目撃したもののだけの者でさえ、ほんの一握りにも満たない。それは、人間が彼らの世界で魔物に出くわすことの、ちよつど逆だつた。呆氣に取られるサラを、責める者はおるまい。

サラの胸が、緊張の音を打つた。こんな時、門番の取るべき対応を思い出す。まずは——人間にも色々いるが、相手が何人か確認することが優先される。

こちら側が、魔の領域だと知つて、討伐のためにやつてきた者ならば、彼女はその力を振るつて全力で始末するだろう。そのために、門番の仕事はただの幽鬼や魔獣でなく、彼女達に任せられているのだから。

一線の先まで退かせれば、それで充分な対処と思われるかも知れないが、例え容易にたどり着けないとは言え、この場所の存在を知られるのは避けたい。

しかし、あるいはそのものが、うっかり迷い込んだだけの、ただの純真な人間ならば。危害を加えるのは無用、それどころか、ご法度である。丁重に宥めて、一線を越えて帰つてもらおう。

そうすることが、彼女の主の望むことだつたから。サラはそれに応えなければ。

唾を呑む。少し詰まらせた。

けほつ、とむせて、少し緊張が解けたのか、近づきつつある人間を見つめる瞳には、ほんの少し揺らぐ気持ちが見え隠れした。

「ただ、ねえ……」

本音を打ち明けるなら、彼女はその人間に大きな興味を持つていた。人間と魔物には、言うまでも無く大きな隔たりがある。

単純に力という点で見ても——一部恐るべき例外がある、とされているとはいえ——それは比べてみるまでもないものだ。

人間が、魔物と出くわしたのと同じ——サラの状況をそう例えたが、それをもつと正しくするなら。

珍しいが、しかし保護種に指定されるほどではない、愛らしい動物を見かけた、というものだ。

それが、魔を打倒する力を持たない人間なら。

「……なおさら、かよわい愛玩動物でしかないもの」
見れば、相手は小さい女の子である。そう思うサラの姿も、見た目は人間の、少女と呼んでいい部類の者とそう大差ない。

魔界人の美的感覚は、ある意味では、人間のそれと変わらない。

——こつそり飼ったらばれないんじゃないかな？
などと、半ば本気で打算しつつも、油断になるほど考え込みもしない。

見かけの可愛らしさと、害を成す可能性は別。

やがて人形が、サラの脇を越えていく。横目で、それが彼女の世界のの産物でないのを確認する。普段なら会話のやりとりもするが、今はその走り去るのを見送りもしない。

それを追う少女は、立ちふさがるサラのことなど見えてすらいないかのように、人形の背中だけを見て必死に走り続けていて、しかしその表情は——

——人間って、意外にお人形さんと変わりない眼をしてるのね。

無感動で、無表情だった。

人形の通った道をなぞってサラの横を通り過ぎようとする少女を、そつと優しく抱きとめる。退魔の針などが仕込まれているかもしれないが、あいにく彼女はそんなので一撃のうちにやられてしまう程度の存在ではない。

そこらを漂ってる幽霊とは違うのだから。